今後の日本宣教のために

2020/8/25
西九州伝道所
佐々木正明

Ⅰ．　日本人の宗教感覚

何につけても、「日本人の」というタイトルをつけると、日本人を良く知っていることを前提とするか、日本人そのものを論じることから始めなければなりません。でも、「宗教意識」となると、あまり一般の人の興味を引く問題でもなく、私たち、日本のキリスト教宣教を考える者の立場からすると、内容のある学びにお目にかかることも、ほとんどないのが現状です。

日本人の宗教意識について、論理的に考えるといっても、とても複雑雑多で一筋縄ではいきません。筋道が見えないからです。でも、この日本人に福音を伝えるという、至上の使命を遂行するためには、日本人そのものの宗教意識を知らなければなりません。これまでの、日本におけるキリスト教宣教の挫折は、日本人を知らず、その宗教意識も理解しようとせず、日本人とは何かということにまったく興味を抱かないまま、「救われなければならない罪人」という、福音主義的な「マジックワード」、でひとくくりにしてしまっていたことによるのです。

雑多な血筋の交じり合った日本人

日本人と一言で言っても、一つの民族ではありません。現在では普通、日本に生まれ住んで日本語を話す人たちを、何の疑いもなく日本人と呼んでいますが、不思議といえば不思議です。歴史をたどると、もともと、日本民族、あるいは大和民族という一種類の民族が日本を独占してきたのではなく、南から北からそして西側から、様々な民族がそれぞれの生活様式抱えて、長期的に見ると「ひっきりなしに」日本列島に訪れ住んで、互いに交じり合い、かなり共通性のある文化を形成して来たものと考えられます。どうしてそのような共通性のある文化が形成されたのか、大変興味深いのですが、いまとなっては想像する他はありません。ただ、狩猟を中心とした縄文文化から、稲作を中心とした弥生文化に移り、かなり定住性が強まり、取り巻く荒海に移住民族の数も程よく限られていた環境が、大きく影響したのだろうとは言えるでしょう。ただこれでさえ、最近は特異な研究が進み、縄文文化は非常に進んだ文化であり、広く稲作が行われており、ユダヤ的要素が非常に強かったという人たちが興っています。

かなり共通した宗教意識

世界中に共通した宗教意識は、普通アニミズムと呼ばれるものがあります。定まった理解や、整った考え方があるわけではありませんが、一般的に、この人間が住む世界には、様々な霊的存在が

共存していて、良くも悪くも人間生活に影響を与えていると考えます。またこれらの霊的存在の多くは、石や木やその他の自然物に隠れ潜むと思われ、人間を始め動物の中に入り込んで支配する、「憑依」という考え方も一般的です。それらの憑依された人間の多くは、霊的世界に通じるようになり、口寄せをしたり、天意を伝えたりするシャーマンの働きをするようになります。古代の日本に移住してきた民族たちの多くも、多分にこのような宗教感覚と、それに見合った行事を共有していたのではないかと考えられます。

ほとんど気付かれていない感覚

それと同時に、普通日本人と言われる私たちの中には、これとはまったく別の宗教意識があるとも考えられます。それは、かなり強固に存在する感覚ですが、一方ではほとんど気付かれずにいる意識です。日本での福音宣教が挫折を続けている最大要因の一つが、この日本人自身が気付かずにいる意識に、宣教する側もまた気付かないまま、これ無視し、敵対するようなやり方をしてきたからだと感じます。多くの日本人には気付かれないままでいながら、日本人の宗教感覚を強く支配しているものは、一神教的感覚です。驚くべきことに、日本人の多くは、唯一絶対に近い存在者を感じて、その感覚に従って行動すると考えられるのです。繰り返しますが、この感覚は、決して露わに表に現れて、日本人の生活を制御するほどのものではなく、むしろ、当の本人が気づかないほど、静かに深く、しかも薄靄（うすもや）の中に隠れたように存在していながら、日本人の宗教感覚と倫理感に強い影響を与えているものです。

日本人の表面的宗教意識

普通、日本は「八百万の神々」に象徴される、多神教の宗教を信じていると言われていますが、それは日本人の宗教感覚の表面だけを一瞥した判断で、奥にまで目が届いていない観方だと感じます。表面的には、アニミズムの世界で、自然物あるいは時には人造物にまで宿る霊たちを神格化し、畏れたり大切に扱ったりしますが、そこに登場する神々は、現代人の感覚からするとあまりにも馬鹿げているために、日本人の多くは「神」、あるいは神々を放棄してしまって、真面目に信じてはいません。（日本語には単数と複数の別がないために、少しばかり混乱しますが・・・・。） 多くの現代日本人にとって、「神」あるいは「神々」とは愚かな存在、古の人々の恐れと空想の産物であって、実在しないものです。少し古い統計ですが、神の存在を信じていない日本人は70パーセントを遥かに超え、最も無神論的な民族だとさえ言われているのです。

日本語の「神」

もともと日本語の「神」とは「うえ」という意味であって、普通の人間よりも少しばかり何かに優れているならば、誰でも「かみ」となれたものです。権威をもった人物や役所は「御上」であり、役職の高い武士は、「頭」や「守」（どちらも「かみ」と読む）という官位を与えられました。頭の毛は「上の毛」であるため「髪の毛」であり、我が家の女房殿は家庭の実権を持っているため「内のカミさん」であり、旅館や料亭を仕切っているのは「女将」です。ですから、少し物事を上手にする者は、すぐその分野の神となれるのです。野球の神様、釣りの神様です。最近は「神ってる」

という新言がはやりました。このようにして八百万もいる神々は、時には小競り合いも起こしますが、おおむね平和に共存してきましたし、ある程度分業化も進んできました。

日本人の曖昧な宗教意識と感受性

そのような宗教意識は、現代の日本人には愚かなものであり、誰も事実としては信じていませんが、それでも、祭儀的な意義を見つけています。それは日本人の宗教意識があいまいだからでもあります。このあいまいな日本人の宗教意識で非常に大切なのが、普段は神という言葉では表現されない「気高く、見ることも、触れることも、説明することも、想像することもできない存在」、あるいは「お方とも言うべき存在」への意識です。神の存在を否定し、無宗教を自認する日本人はたくさんいます。ところがその人たちも、決して宗教そのものを悪しざまに言ったり、宗教心自体をけなしたりはせず、かえって大切な物と認めます。それは、日本人がこのようなお方の存在を感じ、その感覚を尊んでいるからです。

このお方はあまりにも気高く大きいために、人間の理性では説明ができないし、言葉や想像力でも描き出すこともできないために、このお方を説明する教義や神学はありません。またそのお姿を描いたり刻んだりする偶像もありません。日本人はこの想像を絶する気高く清らかで大きく力強く、あらゆるものを支配し、太陽を昇らせ雨を降らせ、作物を稔らせ家畜を肥やせ、海に山に命あるものを満たしておられるお方を感じ、その感覚を大切にする強い宗教意識を持っているのです。それは理屈でも理論でもなく、まさに感覚です。感受性です。そして折に触れてはこのお方に命を頂いている、生かしていただいていると感じて、感謝の念を持つのです。すべての物に霊が宿っている、あるいは神が宿っていると感じている、アニミズム的神観をも持っている日本人も、それらの多くの霊とは別の、異なった、あるいはまったく次元の違う存在者、むしろ唯一の存在というべき者さえ感じているのです。ただこれらの霊的存在が、どういう秩序と序列で住み分けをしているのかは、まったく不明で雑然としたままです。

神ではない神、神以上の神

日本人はこの唯一至上の存在を感じていても、その存在を神とは呼びません。お名前さえないのです。神と呼んでしまっては、冒涜に当たると感じているのかもしれません。私たちクリスチャンが信じているお方も同じです。「神」ではないのです。神ではない神、神以上の神であって、日本人の意識に非常に近いのです。昔、アブラハムはこのお方の名前を知りませんでした。まさに自分が信頼しているお方、であり、子のイサクも信頼し、孫のヤコブも信頼したお方でした。周囲の人々は神々を信じていましたので、アブラハムも子も孫も、たくさん存在する「神々」のひとりとして、信じていたのかもしれませんが、明らかに神以上の神として、神々ではない神として信頼していたのです。モーセにこのお方が現れてくださったとき、モーセはこのお方を何とお呼びすれば良いのか、何と言ってイスラエル人に紹介すればよいのか、わかりませんでした。それでこのお方に直接お尋ね申し上げると、このお方は「私は存在する」であるとお答えになりました。このお言葉は非常に形而上学的であり、あまりにも意味が深すぎて、そのような思考に慣れていなかった当時の人々には、まさに謎そのものであったことでしょう。現代の我々にとっても、手に余るほどの

深淵な意味が隠されていると言えます。

そこでこのお方が次になさったことは、ご自分が、エジプト人を始めとする周辺の民族が信じていた、様々な神々より力強いお方であることを、出エジプト記の初めに記されている様々な奇跡をもって、証明することでした。そして、それでも不充分ということで、次の手段として天地創造の物語を聞かせて、ご自分があらゆるものを超越した絶対者であり、天地の創造者であると、自己顕示、自己紹介をしてくださったのです。天地創造の物語は、天地創造の経緯の記録ではなく、神ではない神、神以上の神であられるお方の自己紹介なのです。当時の聖書の背景となった宗教文化は、現代の日本と大きく変わらず、たくさんの神々はあっても、絶対者の存在は人びとの意識の表には現れておらず、それを表現する言葉もなかったのです。

聖書が語る霊的存在者たちと日本の神々

旧約聖書に登場する人物たちも、新約聖書で活躍する人物たちも、みな、私たち日本人と基本的に同じ、「神々の世界」に住んでいました。彼らが教えられたのは、そのような神々を迷信として捨て去り、唯一絶対の天地の創造者の存在だけを信じることではありません。そのような神々の存在は、信じていようがいまいが、どうでもよかったのです。大切なのは、天地を創造し、人間を造り、命を与え、生かしていて下さるお方を、自分たちが信頼する唯一のお方とし、「神ならぬ神」として崇め敬い礼拝し、お仕えすることだったのです。

聖書の教えと物語の背景は、日本とよく似たアニミズムの世界でした。日本で言う「魑魅魍魎」の世界や神々の世界が、聖書が描き出している、天使や悪魔や悪霊や幽霊までが「ごちゃ混ぜ」になって、人間たちと同じ次元に、人間たちへの影響力を持って生存している世界なのです。一つ一つの名前や活動は異なっていても、大きな意味での感覚は同じです。そのような世界を否定するキリスト教は、唯物論や理神論に影響された、「近代キリスト教」と呼ばれる時代遅れのキリスト教、18 世紀から 19 世紀のキリスト教であり、聖書の教えに立つキリスト教ではありません。聖書が教えているのは、そのようなアニミズムの世界を認めながら、人間が崇拝し、礼拝し、賛美を捧げ、絶対に服従すべきお方は、創造主としてご自分を現してくださったお方だけだということです。

日本人が無意識のうちに感じている存在

聖書を通して人間に語り掛け、ご自分を天地創造の神として現してくださったお方は、人知を遥かに凌駕した超越者です。幸い聖書を読むことが出来た者は、聖書を通してある程度このお方のことを知ることが出来ます。しかし聖書を持たず、ユダヤ民族が体験したような神の自己顕現をも体験していない日本人は、このお方のことを知りません。知らないながらも、日本人は三つの理由で、このお方のことを無意識のうちに感じています。本能的感覚で知っているのです。その三つの理由は聖書に記されていますが、西欧の伝統的なキリスト教徒たちは、それに気付かず、気づいたとしても無視し続けてきました。ところが、それこそが、日本の宣教を考える上で、非常に大切なことなのです。

聖書に記されている大切なこと第一

伝統的な西欧キリスト教の言うことによると、すべての人間に共通なのは、「ことごとく罪に汚れ、このままでは永遠の滅びに陥ることになるから、神の救いを受けなければならない」という事実です。それはそれで間違いありませんが、それよりももっと大切で、それに先行する共通事実があるのです。それは人間が、造り主であるお方に似せて造られていることです。(創世記１：２６～２７）人間の本性、その根源的な性格は、創造者に似ているのです。その事実の中でも最も大切なのは、霊的な創造者に似せて、霊的な存在として造られていることです。すべての動物の中で、人間だけが霊的な性質を持ち、霊的な命を与えられ、霊的感覚を与えられているのです。だからすべての人間は、民族や国家や文化や時代を超え、霊的なことを想い、宗教的な感覚を備えているのです。宗教を持つことこそ、人間であることの証明です。進化論では宗教は未開の人間のものですが、すべての動物の中で、最も高度な存在である人間だけが宗教を持つのです。宗教の本質は霊的超絶者を感じ、これとコミュニケーションを持つことです。人間は本来、創造主と交わりを持ち、そのお方の愛を感じながら、畏れと敬愛をもって礼拝すべきものとして、造られているのです。

日本人が目に見えず、手で触れることが出来ない、気高く大きく強く愛と恵みに富むお方の存在を、心の奥深くで感じるのは、このお方にそのように造られたからであり、人間としての本能だからです。ただ西欧のキリスト教が正しく指摘しているように、すべての人間は罪によって堕落し、創造者の下を離れ、その創造者に似せて造られたもともとの感覚も、歪められ、曲げられ、破壊され、本来の姿を損なってしまい、正しく機能しなくなっているのです。しかし、創造の時に創造者に与えられたこの人間としての資質は、完全に壊されてしまったのでも、失われてしまったのでもありません。不完全ながら、まだすべての人間が、この気高いお方を感じる能力を所持しているはずです。ただ、その感じ方、その能力には、文化や教育など育った環境によって大きな差があります。日本人は特にその本能的な感覚に優れていると、考えられるのです。

聖書に記されている大切なこと第二

天地の創造者は、人間が罪を犯して堕落してしまった後にも、被造物を通して、すなわち自然物を通して、ご自分の永遠の栄光の性質、永遠の神性を人間に現わしてくださいました。それはローマ書の第一章に、パウロによって明らかに記されている通りです。ところが人間は、自然を通してご自分の栄光の性質を現してくださった、創造者の意に反して、こともあろうにその被造物、すなわち自然物を「神」として拝み、これらを刻んで偶像としてしまったのです。そのために天地の創造者は、人間をその愚かな欲求のままに捨て置かれたのです。その結果、偶像礼拝がはびこり、霊感を受けたパウロの記述によると、ホモやレスビアンがあふれ出しました。また、列挙されている21 に及ぶ罪にも満ちるようになったのです。

ところが日本人の宗教観は、パウロが述べたものとは少なからず異なっています。日本人の本来の宗教観では、偶像が存在しないのです。目に見えず体で触れることもできない、気高く聖く尊く大きく強く優しいお方は、人間の想像を超越し、言葉でも絵でも彫像でも表現することが出来ないお方なのです。ですから日本人の本来の高度な宗教観の表現では、偶像は存在しないのです。偶像

が存在するのは、本来の高度な宗教感覚が少しばかり堕落した場合と、仏教伝来の結果がもたらしたものです。日本人本来の崇高な宗教意識をパウロが知っていたとしたら、いった何と言ったことか、想像してみるのも悪くありません。

先に述べたように、日本にはいろいろな民族が渡来し、混合してきました。その宗教心もまた、渡来人の影響のもとにあったはずですが、日本では独自の発展の仕方をしたらしいとしか言えません。素直な本能的感覚が重んじられたのです。それでいてアニミズムの感覚も無くなっていません。聖書の教えからしても、アニミズムの世界観は間違っていないのですから、それを無くする必要はありません。間違っているのは、アニミズムに表現されている、様々な霊を崇めたり礼拝したりすることです。さらにもっと大きな誤りは、アニミズムの世界観を否定することです。つまり天使だとか、悪霊だとか、魑魅魍魎の存在を否定することこそ間違いなのです。

聖書に記されている大切なこと第三

三つ目の大切なことは、文字で書かれた律法を持っていない人でも、心に記された律法を持っているという事実です。パウロの言い方によると、律法を持っていない者が律法の要求を満たしているとするならば、その人自身が自分に対する律法なのであるということです。パウロは説明していませんが、これは創造者に似せて造られたという、人間の本性、根源的人間性と並べて理解されるべきものです。つまり、人間は人間である限り、生まれながらに創造主に似た性質を持っていて、その本源的な性質が、律法としての役割を果たしているのです。「原罪」、すなわち人間の罪の性質ばかりを強調してきた、西欧キリスト教が見落としてきたところです。人間はおしなべて創造者である神の性質を持っているために、愛し、慈しみ、憐み、公平を喜び、正義を高揚し、不正を憎み、偽りを嫌うのです。このような基本的な、あるいは原則的な倫理観もまた、人種や民族や国家を超えて、普遍的な人間性として存在しているのです。それは人間の本能なのです。

日本人の姿を観察していてすぐに思うことは、日本人はこの創造者に似せて造られた性質を、無意識ではありながら、素直に、よりあからさまに、日常で表現しているということです。日本人は聖書を知りません。クリスチャンの生き方も、聖霊の力も知りません。しかし、そのようなことをすべて知っている、クリスチャン諸国の人々に勝るとも劣らない、高度な倫理性を備えています。もちろん、日本より高い倫理や高度な公徳心を持つ、キリスト教国家や民族もあることでしょう。それが当然のはずだからです。でもそのような国や民族は多くはないでしょう。

いま伝統的キリスト教国家や民族で、若者たちのキリスト教離れが急速に進んでいます。彼らの多くが、伝統的キリスト教の実態に失望しているのです。自分たちが理想とする倫理や公徳心といった人間性は、伝統的キリスト教より優れていると感じています。伝統的キリスト教では、そのような物を養うことが出来ないと痛感しています。自分の内にある人間性の方が正しいと感じ、それを養い生かそうとしているのです。彼らは知らないかも知りませんが、その人間性は、神に似せて造られたものなのです。

宣教者として大切にすべきこと

日本人に福音を伝えようとしている者にとって、大切なのは、創造者であるお方を明らかにしてあげることです。私たちはキリスト教という西欧の宗教を教えるのでも、西欧の神様を連れて来て紹介するのでもありません。ましてや、日本人の心の奥深くで本能的に感じている宗教感覚を否定し、キリスト教的宗教観を受け入れるように勧めることでもありません。むしろ、多くの日本人が昔から心の奥で感じ、良くは分からないままに大切にしてきた本能的な感覚である、一神教的な感覚、超絶者を認める感覚を大切にしてあげるべきです。もしもその感覚が薄く、本人にもほとんど自覚がないとするならば、その自覚を促すようなお話をしてあげるべきです。日本人が神ではない神、神以上の神として、幼い時から抱いてきた畏れと敬愛の情を正しいものと認めて、その神ではない神、神以上の神についてお話すれば良いのです。外国から、スーツケースに入れられて持ち込まれた神を信じるように勧めるのではなく、太古から今に至るまで、日本におられ、日本を祝し守ってきてくださったお方を、もっと明確に認めて、感謝を捧げることを教え、このお方のお喜びになる生き方を、お教えすることです。このお方がお喜びになる生き方とは、このお方が愛してやまない人間を、心から愛し大切にすることです。

Ⅱ.　日本人の崇高な宗教感覚と神道

日本人本来の宗教感覚は、非常に崇高です。多くの日本人が、創造者に似せて造られた性質を、宗教的本能としてより良く保っていると思えます。その理由は、よくわかりません。そのようなことを研究した文献も知りません。それで、筆者自身の聖書理解と、それに基づいた洞察を記す以外に方法がないのです。

偶像の不在

筆者自身は、折に触れて、そこここでしばしば語ってきたことですが、日本人の内にある崇高な宗教感覚では、一切の偶像を否定し排除する事実に、心を留める必要があります。言葉による偶像である神についての論説も、絵画による偶像である宗教絵も、彫刻や彫塑による偶像である像も、一切認めず、これを作らず、設置しないのです。大社や神社のもっとも奥深いところに入っても、そこに偶像は無いのです。時には米粒が置かれていたり、鏡がおかれていたりするということですが、それは偶像、すなわち礼拝される対象物ではなく、代（しろ＝代理)、すなわち何らかの意味で、気高い存在者を暗示するものなのです。

目に見えず手でも触れることが出来ない超越者に対する、このような感覚を持っている日本人は、ローマ書一章で言われている神の「懲罰」をあまり受けていない、稀有な民族だと考えられるのです。日本人宣教師としてアフリカで活動してきた方とお話ししたとき、アフリカの多くの民族にも、偶像は存在していなかったけれども、目に見えない超絶的な存在を心に感じていたと聞いたことがあります。アフリカの人たちは、その祝いや祭りが宣教師たちに誤解され、偶像礼拝の濡れ衣を着せられているということでした。筆者自身が宣教師として働いていたフィリピンの未開部族にも、至高の存在者の感覚がありました。しかし、その存在者の偶像というものはありませんで

した。あまりにも気高くて、罪ある人間の礼拝さえ受け入れられないということで、その存在者を対象とした宗教行事は、一切ありませんでした。手掛かりは細く、弱く、不確かですが、そのような至高の存在者の感覚を接点とし、福音を語るべきではなかったかと、深く反省させられています。当時の筆者には、それは、未開部族の曖昧な宗教心に過ぎず、偶像礼拝に近い穢れたもので、話題にするのも嫌だったのです。

高潔な宗教心と倫理

日本人の倫理的高さ、高潔さはしばしば話題になります。すべてではないとしても、多くは事実でしょう。その背後には、いろいろな理由が挙げられています。そしてそれらの多くも、的を射ていることでしょう。でも、日本人の宗教的感覚が理由として上げられているのは、聞いたことがありません。日本人には、「昔から誰かがご覧になっている」「どなたかが知ってくださっている」という感覚を持つ人が多いのです。「お天道さま」（おてんと様と同じ）という言葉があり、太陽を神格化した言葉であると言われていますが、多分それは単純に、超絶者に近い良く分からない存在への愛称でしょう。その超絶した存在に見られている、知られている、理解されているという感覚が、日本人の高潔さに通じているのでしょう。

また日本人の多くには、人間的な高潔さを見ることができます。古い話ですが、戦後の食糧難で国民全体が腹を空かせていたとき、「絶対にヤミ米には手を出さない」と、闇物資を取り締まる判事としての信念を貫き通し、餓死した山口良忠という方がおりました。（ちなみに彼は神官の息子でした）その話に、みんなが「馬鹿な奴だ」と笑いました。しかし同時に、だれもが、そのような高潔さに心を打たれ、そのような日本人がいてくれたことに、密かに感謝したものです。自分にはそこまでの志を実践することはできないけれど、自分に代わってやってくれた人がいたと感じ、日本人であることに感動したものです。そのような精神、あるいは倫理は、誰かに見られているとか知られているとかいう問題ではなく、自分の内側から湧き起こってくる、自分らしい生き方です。正しかったか間違っていたかということさえ超えた、本能的倫理観です。それはまったくの「聖」であられる創造者に似せて造られた、人間の根源的本性のあらわれです。

もちろん、日本だけが高い倫理を持っているというのでも、他のすべての国々に比べて、どうだと言うほどの知識を持っているわけでもありません。ただ、いわゆるキリスト教文化を長い間保持してきた国々と比べても、決して引けを取らないとだけは言えるでしょう。彼らは書かれた律法を持ち、教会を持ち、説教をきき、キリスト教的愛と倫理を教えてこられたにもかかわらず、そして本当に生まれ変わったクリスチャンの内には、事実、聖霊がお住みになって働いておられたはずなのに、あの程度なのです。一方日本は、聖書も持たず、教会も極端に少なく、キリスト教の神には敵対意識さえ抱いている人たちが多くても、これだけの倫理観を持って居るのです。

日本人に気付いてもらう

日本人に福音を伝えようとする者は、このような日本人と、そのような日本人を作り上げて来た社会と、その背後にある宗教意識を良く理解すべきです。日本人の美しさを称賛し、その宗教観を

高く評価して、アメリカなどの戦勝国が築き上げた、「戦争犯罪者国家日本」のイメージを払拭して上げるべきです。そして多くの日本人が、多くの西欧きりスト教信徒たちに勝るとも劣らない、直感的神意識で高度な倫理的社会を築き上げている事実に、気づいてもらうべきです。そして、日本人が昔から感じ続け、崇め続けて来た、目に見えず手で触れることもできない高貴なお方こそが、私たちクリスチャンが信じている天地の創造者であると、お話しして上げましょう。使徒パウロは偶像に満ちたアテネで、「あなた方が知らないで拝んでいるお方についてお話ししましょう」と語り始めたように、僅かでも残っている正しい宗教観を利用して、正しい神知識へと導いてあげましょう。

第二の堕落・偶像礼拝とその罰

　日本人は、・・・パウロの記述から推測すると・・・、人類の第二の堕落ともいえる偶像礼拝を避けてきたために、道徳的腐敗に陥らず、高度な倫理的社会を形成して来たと考えることが出来ます。ここ２千年の歴史を垣間見るだけで、いわゆるキリスト教国が犯してきた残虐性は、あまりにも醜いものです。聖書の教えが強調されたプロテスタント諸国が力を得るようになってからでさえ、その残虐性は少しも衰えていません。聖書の素晴らしい教えに反し、キリストの美しい模範に反し、キリスト教こそ、世界の歴史上、最も人道に反したことをやり続けた宗教です。天地の創造者が人にお与えくださった、神の美しい性質に、真っ向から反することを行い続けたのは、キリスト教国を自任し、キリスト教文化を誇った人々です。

　筆者個人としては、徳川時代のカトリックが殲滅されたことを喜ぶ者です。当時のカトリック国が世界中で行っていた、極悪非道さを学んでそう断言するのです。日本がプロテスタント国にならなかったことを喜ぶ者です。第二次世界大戦においてすら、イギリスやオランダやアメリカのような、残虐非道なことをしないで済んだからです。第二次世界大戦のさ中、日本軍がどれほど残虐非道なことを行ったか、戦後アメリカの監視のもとに教育を受けた筆者たちは、アメリカの偽りの情報に騙され続けてきました。日本軍も、戦争ですから、残虐なことを行ったに相違ありません。でも、キリスト教諸国が行った犯罪性は、それを遥かに凌ぐものでした。この戦争で最も非人道的方法で、多くの人を殺した国家の一つと思われるドイツも、カトリックとプロテスタントが半々のキリスト教国でした。さらに多くの人を殺したロシアも、共産主義の時代だったとはいえ、その精神的土壌はロシア正教と言われるキリスト教でした。

天地万物の創造者に似せて造られた、本源的人間性を現している日本人

　すでに述べたように、日本人が絶対に正しいとも、罪を犯したこともないなどと言おうとしているのではありません。でもそれは多くの民族や国家に比べて、またキリスト教をも含めた多くの宗教の信奉者たちに比べて、少なかったし、今も少ないという事実を指摘しているのです。そしてその理由を、聖書の記述から推察して、日本人の宗教心の中心にある、唯一の超越者に対する畏れと、そのお方に似せて造られた人間性の本質を、素直に現していく日本人の精神性、あるいは倫理性だと判断するのです。これは日本人自身にさえ自覚されていない事柄であり、日本人クリスチャンたちも気づかずにいることです。

そしてその日本人の精神性、高度な倫理性は、日本人が偶像礼拝を避けこれを排除してきたために、民族として神の刑罰を免れ、第二の堕落とも言うべき事態に陥らなかったことによると、考えられるのです。もちろん、現代の日本には偶像が巷に満ち溢れていますが、そのことについては後述します。

人種差別

聖書には、人種の違いについての記述は、いく度か残されています。ところが、人種差別に相当するような記述は出てきません。かえって、まったく差別意識を持っていなかったと思わせる表現がいくつあります。ユダヤ人の選民思想が間違ったものであるとことは、くり返し述べられていますが。それ以外の差別意識は、まったく出てこないのです。

ところがキリスト教の歴史は、まさに差別の歴史でした。15 世紀から始まり 20 世紀まで続いた、欧米白人キリスト教国による近代植民地主義は、全世界を蹂躙し尽くしました。欧米キリスト教国家の殖民地とならずに済んだのは、日本とタイだけです。(アフリカのリベリアは、アメリカが解放奴隷のために造り上げた国家ですから例外です。また正確に言うと、ネパールやブータンという国々も、植民地にはならずに来ました。それは皮肉にも、あまりにも険しく貧しい土地にある国家であるために、欧米諸国の植民地意識からさえ、見捨てられていたためです。) 肌の色の違いによる人種差別だけを取り上げても、まったくひどいものです。アメリカでは早くから人権問題が取り上げられ、独立宣言の中でも人間の平等が高々と謳い上げられています。しかしここに含まれるのは、白人だけだったことが明らかです。有色人種は含まれていなかったのです。先住民であったアメリカ・インディアンは殲滅され、アフリカから誘拐略奪されて来た黒人たちとその子孫は、幾世紀をまたいだ長い期間奴隷として、文字通り、牛馬と等しく働かせられ虐待され続けたのです。当然人権などは認められませんでした。またアメリカと同じようにイギリスも、その他のキリスト教国も黒人奴隷を当然のように認めていました。

このような人種差別は黒人だけに対するものではなく、有色人種一般に対するものでした。当然日本人も差別の対象ではありましたが、日本はその国力から幾分和らいだ差別に甘んじていたというところです。しかし日本は、カナダでの日本人差別を発端として、1919 年のパリ講和会議で、人種差別撤廃条約を提案するに至りました。これが世界最初の人種差別撤廃ののろしでした。この提案は１１対５で賛成が多かったにもかかわらず、人種差別をなくしては自国がなりゆかないと判断した、議長のアメリカ大統領によって廃案とされてしまいました。これが、ある意味で、大東亜戦争へつながっていったのです。日本がおこした大東亜戦争は、アジアへの侵略と捉えられがちですが、西欧キリスト教国に植民地とされ、過酷な条件で生きざるを得なかったアジアの人々を開放し、人間としての権利を取り戻させるという意味もあったのです。日本は結局敗戦により、その夢を果たすことはできませんでしたが、戦後、アジアの国々を始めとし、世界中の植民地国がが次々と独立を果たして行った背後には、日本の果たした役割が大きかったのも事実です。

日本に人種差別がまったくなかったと言えば、嘘になることでしょう。鬼ヶ島で退治された赤鬼

青鬼は、日本近海で難破したヨーロッパの船の生き残りが、日本人に殺された悲しい出来事であった可能性も否定しません。近隣のアジア人たちを侮蔑していた日本人も、たくさんいたことも事実です。しかし信長が、アフリカからつれてこられた黒人奴隷を買い取って、差別もなしに寵愛して、そばに置いていたということも事実の様です。欧米キリスト教国のような露骨な人種差別は、国家としての政策としても、個人の精神の中のこととしても、日本にはあまりなかったのです。くり返しますが、日本人は文字で書かれた律法、すなわち聖書は知りませんでしたが、創造者に似せて造られた性質という、文字によらない律法はしっかり持ち続けていたのです。

人種差別と奴隷制度について

日本の歴史にも、人身売買もあり、実質的に他人の所有とされる「奴隷の身分」の人たちも、少なくありませんでした。近隣部族との争いで負けた者や、借金で自らを売り渡さなければならなくなった者、またはその子孫など、理由はさまざまですが、類似の身分は旧約聖書の時代のイスラエルにもありましたし、多くの古代国家にありました。ギリシヤやローマ帝国では、一般市民より奴隷の数が多かったことさえありました。

しかし人種差別が露骨な形で現れた形の、非人道的奴隷の売買は、オスマン帝国がアフリカ大陸からの大量の黒人を拉致して、売りさばいたのが始まりと考えられています。それを力によって征服したキリスト教国が、うまい儲け話として取り入れたのです。特に、15 世紀に至って、カトリックの教皇が、ポルトガルの世界征服を許可して奴隷売買をも祝福したため、キリスト教国の奴隷売買が一気に広まりました。この植民地主義と一つになった奴隷売買と、奴隷制度の確立は、その後力を持つようになったプロテスタント諸国でも、ますます強固なものとなっていきました。彼らはおもに現在の象牙海岸地方で、暴虐の限りを尽くして黒人を拘束し、世界各地の人手を要している国々に、商品として売り渡したものです。

筆者はもともと、そのようにしてアメリカに送られ牛馬のように働かされ、売り買いされ、まったく人権を認められなかった黒人奴隷たちが、苦しみの中で歌い繋いできた黒人霊歌が好きでした。日本に帰国してから知った、「Lord, How Come me Here？ 」という歌を、最も悲しい歌だと感じています。タイムス紙によって 20 世紀最大の歌として選ばれた「Strange Fruit」という歌は、黒人霊歌ではありませんが、黒人奴隷の悲惨さを歌った歌として、忘れることが出来ません。（どちらもユーチューブで観ることが出来ますので、是非どうぞ。）民主主義、平等、人権が標語のような国家アメリカで、公民権が認められたのは、筆者が聖書学校で学んでいたつい先ごろの出来事です。「I have a dream」という、マルチン・ルター・キング牧師の演説を、彼が暗殺された後に、感動とともに聞いたものです。

筆者が言いたいのは、日本には人種差別がなかったとか、奴隷制度がなかったということではありません。実質的には日本にもあったのです。筆者が言いたいのは、人種差別を根にした黒人奴隷制度が、キリスト教国によって世界中に広められ、強化され、何世紀にもわたって繰り返されていたという事実なのです。そしてそのような差別は、今でもアメリカで見ることが出来ます。日本に無教会主義と呼ばれるクリスチャンたちが存在するのも、内村鑑三がアメリカの教会で、人種差別

に遭遇して、まともな取り扱いを受けなかったという出来事が背後にあります。

高潔な神道的感覚と堕落した神道

日本人の宗教意識には、非常に気高い部分と低俗な部分が混在していて、整理されないままになっています。非常に気高い部分では、創造者であるお方に似せて造られた部分が、素直に表現されています。すなわち、彼らが、非常にぼんやりとではあっても、本当に崇めるべきお方と感じているのは、目に見えず、体で触れることが出来ないお方、人間の思考と感覚を超越しているために、文字でも絵でも像でも表現できないお方として、偶像を一切排除しているところです。一方、その感覚が僅かだけ堕落すると、神道と言う宗教になり、さらに様々な民間信仰や俗信につながっています。日本人の気高い宗教意識は神道に直結しながら、厳しく見ると、神道は気高い日本人の宗教意識の、残念な堕落の姿であると考えるべきです。

日本人の神意識と依代（よりしろ）

日本人の至高な存在に対する貴い感覚も、あまりにも薄く不確かなのであるために、日本人の多くは、何とかしてこの薄い感覚を目で見えるもので表現し、少なくても形のあるもので、感じられるものにしたいと願ったのです。それが「依代」というものを産み出しました。これは薄れた至高のお方に対する感覚を助けるものでありながら、偶像とされる一歩手前で踏みとどまっている姿です。依代は自然物でもなり得ますし、人造物でもなり得ます。そのものを通して、目に見えないお方を実感し、その臨在を強く感じるためのものです。

例えば日本人は太陽を拝むと言われています。でも、太陽を神と信じてそれを礼拝している日本人は、果たしてどれだけいるでしょうか。「神」の定義にもよりますが、太陽に人格を感じ感謝を捧げ礼拝をする日本人は、まずいなと思われます。太陽に向かって手を合わせてはいても、日本人は太陽を礼拝しているのではなく、太陽の背後におられ、すべてのものに命を与えている太陽に象徴される、目に見えないお方を想定して、太陽に向かって手を合わせるのです。深山に入ると、うっそうたる森林の中でもひときわ高く太い木には、しめ縄が張られているのをよく見ます。すると、多くの人が、その大木に向かって手を合わせます。同じように海岸では、荒波に削られた奇岩にしめ縄が張られています。それを見る人たちの中には、思わず手を合わせる者が現れます。神道では、この世と霊的な世界の臨界を示すのが、しめ縄だと言われています。苔むす谷あいの小径には、小さな祠が置かれていて、通りすがりの人が手を合わせます。大木も奇岩も祠も神ではありません。むしろ、神がいらっしゃると感じさせる大木を記念とし、奇岩を記念としているのです。また、祠を建てて神の臨在を感じたことを表現し、その場所を大切にしているのです。日本人の多くは、そのような依代を礼拝の対象とはしていませんが、そこに至高で見えないお方の存在を感じているのです。西欧の宣教師たちやそれに影響を受けた日本人クリスチャンが、たちまち「偶像」と断定して非難してしまうものです。

聖書の中に見られる依代

このような依代が、日本人以外の人々の中にも見られるものか、まだよく調べてはいません。しかし、少なくても聖書の中にはいくつも見られるものです。神の臨在と御業を記念するものとして、神様はノアの洪水の後に虹を置いて、これを見るたびに思い出しなさいとおっしゃいました。ヤコブは神と相撲を取った後に石を置いて記念としました。イスラエルの民はヨルダンを渡ったときに、そこに石のモニュメントを築きました。これらはまだ依代とまでは言えないと思いますが、その要素は含まれています。

荒野で挙げられた蛇は拝むものではありませんでしたが、それを見上げる行為を、天地創造の神への信仰の象徴として受け取られました。契約の箱は拝むべき対象ではありませんでしたが、神の臨在の象徴として丁重に扱われなければなりませんでした。牛車から滑り落ちそうになった箱を、思わず支えようとしたウザは、その場で打たれて死んでしまいました。聖い神の臨在の象徴だったからです。どんなに善意であっても、普通の人が決して手を出してはならないものでした。契約の箱にまつわる話は他にもいくつもありますが、至聖なるお方の臨在の象徴であり、それを見る人はまさに神の臨在を感じることが出来たのです。箱の中の三つのもの、アロンの杖とマナの入ったツボと十戒の石板も、神の助けと臨在の象徴でした。天幕も聖所も至聖所も、神の臨在の象徴でした。後には神の御意思ではありませんでしたが、神殿が建設されました。これも神の臨在の象徴で、これが建てられたときは、臨在の顕現である雲が聖所に満ちたのです。しかし、これも礼拝の対象ではなく、神の住まいでさえもなかったのです。建てたソロモン王自らが、そう語っています。

新約聖書でもこの依代の感覚は生かされています。キリストご自身が制定なさった聖餐式のパンと葡萄酒は、決してキリストの体でも血でもなく、礼拝されるべきものではありませんが、たんにキリストの体と血を思い出すべき、モニュメントで終わるものでもありません。むしろ、そこに実在のキリストの臨在を感じるべき、依代としての性格を強く持つものだと理解するのです。

大切なのは、偶像を忌み嫌って厳しく禁じられたお方が、依代を許しただけでなく、それをご自分の側からお定めになっている点です。神はご自分の見えない性質、触れることが出来ない性質が、肉体を持ち、見ることによってまた触れることによって、初めて存在を実感できる動物としての人間の弱さに、思いやりをもって妥協してくださっているのです。

依代としての神社

日本中いたるところに見られる神社も、大木や奇岩と同じように、依代としての役割を果たしています。それがどれほど見事な大社であろうと、山間にひっそりと建つ小さな神社であろうと、日本人はそこに至高のお方が住んでおられるとは信じていません。ただ、そのようなお方がいらっしゃるということを、その神社が語っているだけです。ソロモンが建て、後のイスラエル国家の象徴ともなった神殿も、同じです。普遍的存在としてすべてのものを超越し、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられ、すべてのものをご自分の内に収めておられるお方が、人間が作った建物にお住まいになるわけがないのですが、そのお方の存在を象徴的に現し、そのお方を褒め、讃え、礼拝すべき場所として、「聖別」し、そのお方の臨在を強く感じることはできるわけです。もともと、至高のお方は自然物の中に住んでおられると感じて来た日本人は、神社を建てた後、その周辺

を木々で覆い、大木になるまで大切に育てる習慣を保ってきたことも頷けます。

日本人の神意識の廃頽

日本人の神意識が、偶像を否定し絵も像も拒否している事実は立派です。依代や記念碑なども、聖書の記述にも見られるように、神の許容の範囲であったように思えます。ところが、神の姿をどうしても具体的に理解したいという人間の愚かな欲求が、間違いを引き起こしました。無限で至高のお方を、有限で地を這い回る虫けらのような存在の人間が、説明しようと試みた瞬間から、日本人の宗教心の廃頽が始まりました。たぶんそのような試みは、有史以前、つまり、文字が用いられる以前からあったことでしょう。しかしそれが明らかになったのは文字が輸入されたことによるもので、古事記と日本書紀の二つの書物に明白です。

仏教の伝来と日本人の高度な宗教意識の廃頽

素朴な宗教心で、良くは分からないまま、至高のお方を感じて礼拝をし、祭りを行い、原始的な生活を送っていた日本人は、仏教の伝来によって驚愕させられました。宗教的には、拝む対象をもたず、極めてあいまいなまま目に見えない存在を礼拝していた人々は、燦然と輝く仏像を見て、肝をつぶしたことでしょう。さらに、教えというほどのものを持たないまま、素朴な祭儀を行ってきた人々は、仏教の高度に発達した教義と哲学的な教えに、心を奪われてしまったことでしょう。仏教の伝来は、まさに文明開化でもあったのです。多くの人々が、より優れた文明として、仏教と中国や朝鮮半島の知的技術的財産を取り入れたのです。また神道は、基本的に死というものを汚れと理解し、忌み嫌って粗末に取り扱う傾向でしたが、仏教はその神道の隙間に上手く入り込み、弔いの行事を盛んにすることによって、家族親族、そして先祖までも加える、血族による人間関係の強調することが出来ました。それまでは居住集落の人間関係が、日本人の所属意識の中心だったところに、血族関係による帰属意識を強めることによっても、仏教は強固な基盤を築くことが出来たのです。

神道と仏教はあまり争い事を起こすことなく、共存することが出来ました。もちろん、曽我と物部の争いにも見られるような小競り合いはありましたが、仏教は神道に欠けた領域を埋めるものだったからです。とはいえ、神道に熱心な人々にとっては、仏教は脅威であったに違いありません。特に仏教の発展した教義と哲学を知るにつけて、神道にはそれがないことに危機感を抱いたに違いありません。それで、日本人の高度な宗教意識で一切の偶像を避けて来たにもかかわらず、ここに至って、その宗教意識と、その宗教による日本国の由来を語る必要性が出てきたのです。そのために、日本人の高度な宗教意識は堕落して、ギリシヤ神話にも負けず劣らずの、低級な神話が創造されてしまい、それ以来、この神話が日本の神道の基礎と考えられるようになったのです。つまり筆者の見解によりますと、神道は日本人の高度な宗教意識を引き継いでいながら、実は廃頽したものであるということです。

日本人の宗教意識のさらなる廃頽

現在の日本人の 80 パーセントは仏教徒であり、80 パーセントが神道に所属するそうです。計算が合いませんが、これが現在の日本人の曖昧な宗教意識です。多くの日本人には仏教と神道との違いが分かりません。自分はどちらの宗教に属しているのかも、はっきりとはしません。どうしてそのようなことが起こったのでしょう。それは、仏教が神道の欠けたところを補う形で存在し、神道も、強い反発をしないでこれを受け入れて来たからです。また、感覚として仏教は宗教であるけれども、神道は宗教というより精神文化であると、捕えている日本人も少なくありません。

さらに日本人は、とても実利的な一面をもっていて、なんでも自分たちの生活に役に立つものは良いものなのです。神道は日本人の大らかな宗教心を、廃頽したとはいえ持ち続け、日本人という帰属意識を保たせます。仏教は教義的にも哲学的にも発達し、神道にはない死を取り扱う行事にたけ、血族関係を高揚します。それだけでなく、日本人固有の侘び寂の感覚までも、仏教のものとして理解させるほどに、日本人の心に入り込んでいます。神道も仏教も日本人の実利にかなっているのです。これは高度な日本人の宗教意識が、実利主義的感覚に敗北したことであり、廃頽の一歩です。

神仏習合

とは言え、神道と仏教の争いは避けられないものでもありました。ところが日本人の実利主義は、宗教の争いに益を見出すことが出来ませんでした。争う代わりにむしろ合同してもらうことを望んだのです。ここに神道と仏教の混合、いわゆる神仏習合が起こります。日本古来の神々は、仏教の諸仏であるという言い方です。仏教側からすると本地垂迹（ほんちすいじゃく）です。つまり、人民の理解度が高い西方の国では、仏として現れてくださった方々が、まだ人々の理解度が低い日本では、仏を理解するのは無理だろうから、神々として現れて下さったという理屈になったのです。神道側の人たちがこれで完全に納得したわけではありませんし、仏教側の人々がこれで充分と考えたわけでもなさそうですが、これで一応激しい争いは避けることが出来たわけです。

こういういきさつが一般大衆の場まで降りてくると、神なのか仏なのか分からない偶像が、いたるところに建てられるようにもなりました。いまでは、お寺の中に神社が存在し、神社の中に仏教的な事物が存在することも珍しくありません。普通の日本人が、自分は仏教徒なのか、神道の徒（ともがら）なのか分からなくなるのは当然です。これは、争いを好まない日本人の美しい性質、つまり造り主に似せて造られた性質の現れであると考えられる一方、高度な日本人の宗教意識の、さらなる廃頽と理解することが出来ます。

それでも高尚な宗教意識を保持する日本人

日本の宗教社会は神道と仏教の習合を始め、いたるところに宗教の混合があり、まさに混沌としています。いわゆる宗教人口と呼ばれる、各宗教団体が主張する信徒数を合計すると、日本の総人口の倍以上になるという始末です。それでいながら、色々な宗教団体に所属している人たちも含めて、多くの日本人は、あの気高い宗教本能というか、至高の存在を感じる宗教性を持っているのです。ただ欠点は、ほとんどの日本人がその事実をあまり意識していないことです。でもこれまでの筆者の経験では、話し合った日本人のすべてが、そのような気高い存在を、意識したことがあると

いうことです。話し合うと必ず、自分の中にそのような意識があることを認めます。

ですから、筆者は、「神なんていないと」豪語する、一見無宗教、無神論と見える人には、「私も神なんていないと思います」と心から同調します。日本人がふつう神と呼んでいるものなどは、私たちが感じている崇高な存在者ではないからです。私たちは神ではない神を感じているのです。神以上の存在者を感じているのです。神なんていないと断言し、自分は無宗教だと言い切る人でも、日本人なら大抵の場合、気高い宗教心を否定せず、崇高な存在者に対する感覚を無視することは少ないからです。

反対に「私は神様を信じています」とおっしゃる方には、「そうですか、私も神様を信じています」とお応えします。私も同じだという意識を築いたうえで、「それで、どのような神様を信じておられるのですか」と尋ね、共通点と相違点を見分け、共通点を強調し、積極的に正しい感覚を認めて上げます。聖書が教えている、創造者であるお方を理解できるように話を進めます。

Ⅲ．　日本人が感じる気高い存在と聖書の神

ここで、はっきりさせておかなければならないのは、多くの日本人が曖昧ながらも感じている至高の存在が、そのまま聖書が教える天地創造の神であるとは言えないことです。再三にわたってくり返してきましたが、日本人の多くが感じているのは非常にあいまいで、うっすらと霞み、ぼんやりとした、至高の、あるいは人間を超越した存在であって、それを言葉で表現させると、皆目わからない存在になってしまいます。記紀（古事記と日本書紀）に出てくる神話のようになってしまうかもしれません。ですから、言葉で表現させないで、聖書の教える創造者につい聞かせることが大切なのです。

実は、聖書で語られている至高の存在者、天地の創造者であるお方も、あまりにも人知を超えた存在であるために、非常にあいまいにしか理解されなかったのです。聖書の背景となった当時の世界には、多くの神々が存在していました。でも聖書の神は、それらのどの神とも決定的に異なっていました。ですから天地創造の神を表現できる、適切な「神」という言葉も存在しなかったのです。それで、今、日本語の聖書では「神」と翻訳されている言葉も、もともはと言えば、とても曖昧な意味合いでした。しかも聖書はそのあいまいさを幾分かでも明らかにするためか、「神」という言葉を一つだけではなく、いくつも用いているのです。

この創造者であるお方が、モーセに現れて下さったときの自己紹介は、「私はあるというものである」という、はなはだ哲学的、形而上学的で、現代の私たちでさえも、その意味の深さを測り得ないものです。イスラエル人の先祖であったアブラハムの神知識は、どれほどのものだったのでしょう。聖書はまだまだ書かれておらず、あったのはアブラハムの直感的神感覚と、創造者であるお方が時折、アブラハムに直接ご自分を現してくださったことによるものです。ですから理性的な知識という面では、現代の私たちより遥かに劣っていたはずです。ところが、神との直接の交わり、お付き合いということによる知識と信頼は、非常に深いものでした。赤ちゃんの母親に対する感覚的な知識と同じです。

アブラハムの救い

大切なのは、このようなアブラハムの知識でも、彼が義とされるには充分であったということです。アブラハムの救いは、創造者に対する彼の理性的な知識にはよらず、それまでの交わりの体験に根差す、情緒的な信頼によるものだったのです。創造者はアブラハムの知的理解よりも、情緒的な信頼、そしてその信頼が起こした「信頼する」という行動を、大切にしてくださったのです。

アブラハムは信頼（信仰）によって義とされました。普通の言い方では、信仰によって救われたのです。私たちも同じ信頼によって救われました。ただ違うところは、私たちはイエス・キリストの十字架の贖いを教えられ、それを信じたことです。知的理解を重んじる多くの宣教師や牧師は、それを信じて救われたと理解していますが、とんでもない誤りです。私たちが救われるのは、キリストが私たちのために死んでくださったと信じたからではなく、私たちのために死に甦って今も生きておられる、キリストというお方に信頼して救われるのです。事実を信じてではなく、救い主を信頼して救われたのが、私たちです。でもアブラハムは、イエス・キリストについては何も知りませんでした。その自己放棄の誕生も、人間との完璧なアイデンティフィケーションとしての生活も、十字架の贖いの死も、最終の敵である死を打ち破っての甦りも、知りませんでした。キリストを信頼する信仰についても、必要と言われる悔い改めも、知りませんでした。彼の救いは、イエスキリストを自分の救い主として信じることには、よらなかったのが明らかです。

ではアブラハムにとっての救い主は誰だったのでしょう。イエス・キリスト以外に、救い主がいたのでしょか。旧約時代には、イエスによらない救いがあったのでしょうか。そうではありません。人類の救い主は只おひとり、十字架で贖いの死を遂げられたイエス・キリストだけです。

私たちの知識か創造主の知識か

旧約の時代の人々にも、神の救いはありました。でもそれは、イエス・キリストを知って、彼を信じる信仰によって救われたわけではありません。たとえ彼らが、イエス・キリストについて知らなくても、天地創造の主はご存知であったのです。彼らの救いは、彼らのイエス・キリストについての「知識を得る」という行いによらず、あくまでも創造主の知識、神がキリストの働きすべてをご存知だったという、事実に基づくのです。すべてのことをご存知であった創造主を、アブラハムがやったように信頼することによって、旧約時代の人々の救いは完成したのです。

だとすると現代でも、イエス・キリストを知らないままで、救われることがあり得るかという問題が持ち上がります。聖書の啓示を知らず、創造者の直接の顕現も体験せず、イエス・キリストついての知識も非常に限られ、しかもそれが、かなりの誤解や先入観に彩られている日本人も、イエス・キリストとその働きを正しく理解したうえで、信じなければならないのでしょうか。西欧から輸入された神学ではそうなっていて、私たちはそう教えられました。

しかし私たちの教会の、実際の指導ではどうでしょう。私たちの教会では、救いのためにどれだ

けの知識を期待し、どれほどの理解を要求しているでしょうか。たとえ、どれほどきちっと教えたとしても、正しく理解されることなどあり得るのでしょうか。筆者などは、50 年以上も伝道者を続けながら、イエス・キリストの十字架の奥儀など、充分に説明することはできません。それどころか、満足に理解さえできていません。神のみ旨など、はかり知ることが出来ないからです。

十字架の上で死を目前にしながら、キリストから救いの約束を頂いたと思われる、あの強盗殺人者は、キリストについてどれだけ理解していたのでしょう。彼の言葉は信仰の告白として、あるいは悔い改めの言葉として、受け入れられる程のものだったのでしょうか。でも日本の牧師や信徒たちは、かすかに信仰がくみ取れそうな言葉を取り上げて、慰めにしているのではないでしょうか。おじいちゃんが死ぬ直前に、僅かに語った信仰的なことば、お母さんが亡くなる前に、クリスチャンである子どもたちに語った、クリスチャン的な言い方を信仰の告白と受け取って、おじいちゃんは救われた、お母さんは天国に行ったと証をしていないでしょうか。それよりも、日本人クリスチャンの内のどれだけの人が、キリストに対するしっかりとした知識と理解をもって、クリスチャンと認められたのでしょう。多くのクリスチャンは知的理解よりもむしろ情緒的な決心、あるいは決心もないまま、何となくクリスチャンの仲間に加わって、自分はクリスチャンだと思ったり、思われたりしているのではないでしょうか

もしもキリストによる救いが、キリストとその働きについて正しく理解することを、前提として求められたならば、筆者などは決して救われなかったことでしょう。キリストとその働きを、ある程度正しく理解すのは重要であり必要です。しかしそれは救いの条件ではないはずです。

新約聖書の教えは?

では、「救いはキリストを知り、キリストを信じることによる」と語っているように読める、新約聖書の教えはどうなるのでしょう。新約聖書を素直に読む限り、そのように教えられていますし、悔い改めも要求されています。そこで筆者は考えます。「新約聖書は基本的に、旧約聖書をある程度、あるいはかなり理解している人、ユダヤ教の教えについても相当の知識を持ち、罪についてもある程度の自覚を持っている者を、読者として想定して書かれているのです」と。

確かに新約聖書の多くを書いた使徒パウロは、キリストを信じる信仰が、救いに至る絶対条件であるかのように書いています。確かに彼は異邦人宣教の使徒であり、異邦人教会に向けて書簡を送りました。でも、彼の聴衆や読者の大部分は、ユダヤ教の知識を持っていた人たちであり、キリスト、すなわち救い主を待望していた人たちでもあったことを、良く考慮しなければなりません。パウロはパウロの時代の、パウロに任せられた人々という条件の中で、あのように書いたのです。与えられた時と場という事情の中で書いたのであって、普遍的な読者を前提として書いてはいないということです。その与えられた条件の中で書かれた、ある意味で特殊な教えを、そのまま普遍的な教えとすることは正しくありません。確かにパウロの教えには普遍的に適用できる部分もあるのですが、すべてがそうなのではありません。むしろ普遍的な教えを、パウロの事情に適応させて書いたのです。女は髪を編んではいけないとか、ベールを被れとか、教会では黙っていなさいと言う教えも、あくまでも彼の時代と場所という条件に、普遍的教えを適用したもので、現代という時

代と日本という場所に、その適用をそのまま持ち込んではならないのです。

言い換えると、パウロは、日本人のような、まっさらな異邦人を想定して書いてはいなかったということです。さらに、パリサイ派の秀でた学者だったパウロは、あくまでも「ユダヤ人という立場」から、福音はユダヤ人に留まらず、全世界の人たちに公平に及ぶと主張したのであり、「異邦人の立場」から、福音は初めから異邦人の救いを目的として計画され、その過程において、イスラエル人が重要な役割を果すように、選ばれ用いられたという思考は持っていなかったのです。だからこそパウロは、キリストを信じる信仰だけによって救われるという議論をしながら、突然話題をアブラハムに飛ばしてしまうことができたのです。確かにアブラハムはユダヤ人の先祖ですが、ユダヤ人ではなかったはずです。まだ、律法も与えられていなかった時代の人です。そしてパウロは何の説明もなく突然、「アブラハムは神を信じた。そして義と認められた」と言い、救いは信仰によるのであるという教えの正当性を主張するのです。キリストを信じる信仰と、旧約時代の創造者である神を信じる信仰の、共通性も違いもまったく気に留めずそのまま素通りしているのです。

私たちは、パウロが書き残したものを「霊感を受けた誤りのない神の言葉」として受け入れながら、その記述を基盤として、それを一つの時と場という条件から解放し、現在の自分たちに必要な神学を、発展させて行く使命を与えられているのです。

アブラハム・イサク・ヤコブが知っていた神

筆者の知っていたクリスチャンに、美奈子さんという方がいました。マニラで知り合い親しくしていたのですが、日本に帰国してから癌を患い、死を待つベッドに横たわっていた時、横浜の病院にお訪ねしたことがあります。とても明るく美しい方で、尼さんのようになった頭も隠さず、朗らかにお話しして下さいました。「少し前、主人がとうとうクリスチャンになる気になったらしいのよ！ 神様にお祈りしたって言ってくれたの。それがね。『美奈子の神様』って始まる祈りだったのよ。『なんて呼び掛けていいのかわからなかったから』ですって！」

天地創造の神は、長い間、なんて呼び掛けたらいいのか分からない神様でした。それでイスラエルの人々は、自分たちの先祖であるアブラハムが信じていた神、その息子のイサクも信じていた神、さらにその息子のヤコブも信じていた神ということで、この３人の名前を被せて神様をお呼びしていました。「美奈子の神様」も、否定されるべきものではありません。八百万の神々がある中で、仏教と習合した神も大勢いる中で、おひとりの方だけを特定できればいいのです。

イスラエルの人々は自分たちの神の名を、文字では書き記していていたのですが、口で発音するのはあまりにも恐れ多いと、非常に長い間、他の言葉、例えば主という意味のアドナイに直して読んでいました。そのためにもともと書き記された文字を、どのように読んだら良いのか、誰にもわからなくなってしまったほどです。それが近代まで続き、学者たちがこれは「エホバ」と読むのだと言い出しました。そのために、そのころ創立された疑似キリスト教団体は、自分たちを「エホバの証人」と呼ぶことにしました。ところがさらに研究が進み、これはエホバではなく、「ヤーウエ」と発音するに間違いないとなって、最近はみな、ヤーウエを用いるようになったのです。要するに、

天地創造の神様を呼んでいることがはっきりすれば、それで良いということです。

父なる神

父なる神という呼び方は、キリスト教のものだと考えられていることが多いのですが、実はかなり古くから、様々な宗教で用いられていたものです。聖書の中で父なる神という言葉が一般的なったのは、キリストご自身が、ご自分の父を父と呼び、父なり神という呼び方と概念をお教えになってからです。

イスラエルの歴史の中では、天地創造の神は律法を与え、これを守るように厳格に命じになった方で、命令に背いた者を厳しく罰する恐ろしい神と思われていました。ところがそこに、優しく忍耐深く、寛容に富み、慈愛にあふれ、子供のためには自分を犠牲にするのもいとわない父親の姿を描き出し、それに神の姿を重ね合わせたのが、他でもないキリストだったのです。

多くの日本人が、聖書が教える神は、荒野の厳しい環境で生まれた宗教の、厳しい父なる神だ。日本人が望んでいるのは、そのような父なる神ではなく、優しく抱き寄せてくれる神、間違いも失敗も許し、よしよしと許し受け入れてくれる、懐の深い神だと言っています。このように言う日本人たちの、聖書の読み方が間違っているのは明らかですが、彼らの間違いを責めることはできません。西欧から渡来したキリスト教の神はそのような神で、宣教師たちはその神の厳格な姿をまとって、いつも日本人を罪人扱いにし、日本文化を罪の文化と決めつけていたからです。

でも、キリストが描き出した父なる神は、あの放蕩息子のたとえ話に出てくる、父親の姿に見る神です。自分と家を捨てて出ていき、放蕩に身を持ち崩した息子が、戻ってくることを今か今かと待ち焦がれ、みすぼらしく落ちぶれて戻って来た息子を、いち早く見つけ、駆け寄って抱き寄せた父親です。息子の罪を問うことも責めることもせず、黙って赦し、受け入れ、擦り切れた着物を脱がせて、最上のものに着せ替え、多分はだしだった足に真新しい靴も履かせ、大喜びで子牛を屠り、最高のごちそうを準備して、お祝いの宴を設けた父親です。キリストのお言葉によると、父なる神は、良い者にも悪い者にも、太陽を昇らせ雨を降らせてくださる神です。空には鳥を遊ばせ、野を花で飾ってくださる神です。キリストがあがきだす父なる神は、まさに、日本人が望む母なる神のイメージと同じなのです。

私たちは、怒り狂う猛々しい神ではなく、優しい神、恵に富む神、寛容と忍耐をもって、慈しみに富む目で人間を見、赦し、受け入れてくださる、日本人が理想とする神を紹介することができるのです。日本人が知らなければならないことは、罪の刑罰が待っていることではなく、燃える地獄の火を恐れるべきであることでもなく、このような神が、私たちを愛しておられるという事実です。そして、この神に信頼するならば、罪の刑罰も、燃える地獄の火も怖くないという事実です。

付録

※※　依代（よりしろ）の意味について。　日本語の「依代」という言葉は、あまり用いられない時代になっていますが、日本人の宗教感覚、特に神道的な宗教感覚を語るには、欠かせない言葉で

す。ちなみに、辞精選版 日本国語大典 では、「 神霊が出現するときの媒体となるもの。神霊の寄りつくもの。正月の年神の依代としての門松などのような特定の枝葉や花・樹木・岩石、あるいは形代(かたしろ)・よりましなど、きわめて種類が多い」と、説明されています。しかし私のエッセイの中では、本来の日本語の意味を変えて、「無限の霊的存在である神が、人間にご自分の臨在を強く示すためにお用いになる、象徴的な事物」という意味で用いています。誤解されやすいのですが、日本語には私が表現したい意味の言葉がないための苦肉の策で、依代が最も近い意味を持つと思われるための借用です。とても不思議なことですが、聖書には、このような方法で神がご自分の臨在をお示しになっている事例が豊富なのに、英語には、神学的表現としても、一般的会話の表現としても、そのような意味合いの言葉がありません。伝統的なキリスト教には、聖書が大切にしているそのような概念が、まったく欠けている明らかな証拠となります。日本語の依代では、いわゆる憑依という現象、普通は「憑りつく」とか「のりうつる」とか言われる現象として語られ、聖書にもそのような事例が、多数記されています。しかし私がエッセイの中で、「依代」を用いる場合には、憑依の意味を完全に排除し、臨在の強調を語っていることをご理解ください。